イノセント・ワールド

石針三文

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
イノセント・ワールド

【Ｎコード】
Ｎ５４１４Ｆ

【作者名】
石針三文

【あらすじ】
生きる事が嫌になった女子高生リサは偶然、この世の裏側の世界へと迷い込む・・・。

第1話：始まりは夜空の下から

私は今、ビルの屋上から下界を眺めている。
上から見下ろしても、下から見上げても代わり映えのないこの世界。
汚い人間で創られた汚い世界に、私はもう嫌気がさしたのだ。

ひとりでいる時には何もできないくせに、集まったら偉そうに振舞う。
面倒くさいって言ってやりたい事しかしないのに、人には厳しい事ばっかり言う。
助ける気もないのに『かわいそう』。
そんな人間ばっかだ。ホントにやだ。

きっかけは、ほんの些細な事だった。友達（だった）ノゾミからのメールの返信を忘れていた、たったそれだけ。

「アイツウザくね？」という1人のセリフから生まれたくすぶりは、瞬く間に私を取り囲む炎になり、とどまる事はなかった。
昨日まで笑顔で話してたのに、急に手のひらを返して牙をむいてくるあいつら。
トイレに行けば水をかけられ、机は教室から追いやられ、およそ考えつく限りの凄惨なイジメを一通り受けた私は、今こうして生死の境に屹立するに至ったのだ。

そんな私の思いとは裏腹に、全身を抜ける風は心地よい。出来れば次は、こんな心地よさに満たされた世界がいいな。笑顔でみんな楽しく過ごす世界。ご飯もおいしい、気候も穏やか、そんな世界。最

高じゃない！
その為にはまず、ここを踏み越えなきゃ。
けど・・・

怖い。
ビルから飛び降りる。たったそれだけの事がこんなに恐ろしいものとは、ここに立つまでわからなかった。みんなピョンピョン飛び降りてるのに。
どうしても1歩が踏み出せない。足に根が生えるようとはまさにこの事だ。なんで踏み出せないの？

別にこの世に未練は、ない。
お母さんやお父さんには申し訳ないとは思うけれども、それよりも全身を余す事なく押し潰そうとする絶望の方がはるかに大きいのだ。
もう生きていけない。
そう思ったハズなのに。

ビルから覗き込んだ暗闇は、大口を開けた悪魔に見える。決して動くことはなく、虎視眈々と私が落ちるのを待っているようだ。
これに呑まれたら私はどうなるの??背筋がゾッとなった。ムリムリ。これは死ねない。

でも死なないでどうするの？お母さんには言えないから、また明日学校に行くの？イジメられに？サボる？じゃあサボるにしてもドコに行くの？昼から制服でウロウロしてたら絶対怪しまれるじゃん。
どのみち明るい明日なんて来ないよ。でも・・・

屋上の縁でそんな『一人押し問答』を続けていた刹那、背後で何か

が崩れ落ちた。
ガシャアアンッ！！、と静寂を切り裂く音に私は反射的に振り向いた。

・・・そこには、積み上げられたガラクタに無謀にも登頂を試みた、哀れな黒猫の夢の跡が残されていた。
当の猫も、突然の崩壊という現実が受け入れられないのか、起き上がらずにコロリとしている。

間抜けな猫ね。受身ぐらい取れるでしょ。
ていうか、黒猫ってば縁起悪くなかった、っけ

その時すでに私の身体は、星がまばらに見える夜空を向いていた。
言い換えれば、そう、落ちていたのだ。

私の決心を待てない暗闇の悪魔は、その大きく開けた口から、これもまた真っ黒な舌を私に伸ばしていた。

・・・実際には、振り向いた拍子に足がもつれてバランスを崩しただけだが、私からしたら、これは悪魔の仕業なのだ。決して私がマヌケなわけじゃない。うん。

こうして、女子高校生リサは１６年という短い生涯で、ビルから落ちるという未曾有の経験をすることとなった。

あまりの恐怖から意識が遠のく中、リサの脳裏に映っていたのは、
ベシャと潰れたトマトだった。

２－１話：出逢いは風薫る水辺で

自らのドジであわや、コンクリートに赤い花を咲かせるか、と思われた私は、何故か別の激痛によって無理矢理に目を覚まされた。頭ではなく、鼻の奥が猛烈に痛い。なるほど、頭をすこぶる強打するとここが痛くなるのね。

ん～、敢えてこの痛みを例えるなら、水が入った時の様な・・・・水？！

私は完全に覚醒したと同時に、即座に現状を把握し、パニックに陥った。

これ私溺れてる！？

地面にダイブしたつもりが、何故か水に飛び込んでいた。

そんな不可解さに考えを回す暇が今の私にあるわけが無い。

それに死にたい、という当初の願望も、はからずも果たされているのだが、そんな思いも１００年先まで吹っ飛んで、私は助かりたい一心でただひたすらに手足をもがいた。どちらが水面なのかすら掴み得ない。

ぶくぶく。ガボガボ。

永遠に続けるつもりかこの苦しさ！と誰に向けたのかも分からぬ怒りのこもった絶望を気泡と共に吐き出した瞬間、これもまた突然に陽射しの眩しい世界へと解放された。

目まぐるしく変わる状況に思考が付いていけない私は、全身ずぶ濡れのまま口をポカンと開けていた。

私の目には、1人の少年が映っていた。

いや、少年というには背格好がしっかりし過ぎている。

大人になりかけの少年・・・そう言うのが一番しっくりくる、いわば私と年齢の近い男の子に見えた。

けど私が最も目を引かれたのはその容貌の方だ。

豊穣の大地を思わせる黄金色の髪。

朝露に濡れる新緑の様なエメラルドグリーンの瞳。

まるで別世界の人間みたいね、と私はほんわりとしながら思った。

要するにイケメンなのだ。

情けなく口が空いていたのもそのせいだ。

ちなみに黄金色の大地もエメラルドグリーンの新緑も私は一度も見

たことは、ない。

「大丈夫？」

と心配そうに声を掛けられたと同時に私は初めて気が付いた。

この人、でかくない？

そういえば私は、この人の手のひらの上にいる。

宇宙人ならまだしも、巨人がいるなんて話は聞いた事がない。
大体今いる場所だってさっきの所と全然違う。
こんな緑豊かな所じゃなくて、、ビルが立ち並ぶ街にいたはず・・・

段々と冷静さを取り戻してきた私は、改めて辺りを見回してみた。

小高い崖からは滝が流れている。滝壺の辺りは浅いプールのように
水場が出来ていて、蓮に似た草が花を咲かせている。さらに見渡す
とここは森の中らしく、あちらこちらに木漏れ日が差し込んでいる。

滝壺から糸を引いたように流れる小川に、私と彼は立っていた。

「しゃべれないのかな・・・」

彼は少し困った様な顔をしながら、私の小さな頬をつついた。

「あのっ・・・！」

聞きたい事がたくさんあって言うことに詰まってしまった。
ここはどこ？あなたは誰？巨人ってことはやっぱり巨人ファン？
少々混乱しながらも、言葉を探していると彼が助け船を出してくれた。

「僕はアドニス。君は？」

ますます混乱した。
この人の名前はどう転んでも日本人のそれじゃない。
なのに日本語がペラペラなんて、いわゆる外人のオタクってやつかしら。そう考えるとフツーでない格好にも納得出来るわ。

っと、とりあえず・・・

「私は、リサ。カワハラリサ、です」

「リサって言うんだ。・・・で、リサはなんで溺れてたの？」

「わかんない・・・気が付いたら水の中だったし。
だいいち、ここがどこなのかもわかんないもの・・・」

そう口に出すと自然と涙が出てくる。
なんでこんな事に・・・

「ああ、泣かないでよ！・・・・・まてよ。もしかして、君は」

思い出した様に彼は言った。

「人間の世界から来たのかな？」

「は？」

2―2話：その神は谷の奥底に

「僕が知る限りのことをリサに教えてあげるよ。と、その前に・・・」

そう言うと、アドニスはなんのためらいも無く私の服を脱がしにかかってきた。

「びしょ濡れになったその服を何とかしないとねっ。」

輝くような笑顔には微塵もいやらしさを感じさせなかったけど・・・とりあえずこの変態イケメン野郎の鼻の下にクリティカルな一撃を放っておいた。

なんで殴られたか分からない、と言った顔の彼を尻目に、私は彼の持っていた布切れにくるまり、傍にある岩にチョコンと座った。

「あのね。女の子の服をいきなり脱がすなんて失礼でしょ！？」

「ゴメン、失礼になるなんて知らなくて・・・」

「何よそれ言い訳のつもり！？・・・まあいいわ。それよりもさっきの話を聞かせてよ。」

・・・一通り彼の話を聞いた私だが、とても信じられないことばかりだった。

要約するとこんな感じだ。まず、この世界は私のいた世界とは別の世界であること。ただし、紙の表裏と同じく限りなく密接な世界であるのだという。

それは互いの世界の影響が互いに現れることを意味するらしい。

「君の世界で言う神様なんて言うのはこっちの世界の住人にあたるみたいなんだ。」

「え、じゃあアドニスも神様なの？」

「そうみたい。証明はちょっと、出来ないけどね。」

そういうとアドニスは恥ずかしそうにはにかんだ。

常識がずれてるのも当然なのかも。・・・だからって裸にしていい理由にはならないけど。

「こっちの世界の神様達はなにをして生きてるの？」

「みんなやりたいことをやってるよ。自由にね。」

そういうと彼は空を仰いだ。

「この青い空を一日中眺めたり、海で泳いだり、夕日が綺麗な場所を探しに行ったり・・・君達の世界は皆で集まって生きてる分、窮屈な思いをしてるらしいけどね。僕の世界では遮るものはなにもない！自由なんだよ！」

そう言う彼の顔は眩しかった。

「だけどね」

先ほどと一転、曇った表情でアドニスは続けた。

「今は大地がどんどんと荒れてきているんだ。」

その原因は聞かなくともわかってしまった。

表裏一体のこの世界。私の世界での環境破壊のことは、日頃ニュースを見ない私でも知っている。

森がどんどん無くなっていき、南極の氷が溶けていく。

「今いるこの場所は豊かなんだけどね、ひどい所は草一つ生えていない荒野だったりもするんだよ。」

彼はまるで自分の事の様に苦しそうに話を続けた。

「僕はそんな世界を再生させたくて旅をしているんだ！」

「世界の再生・・・」

なんて途方もない話。こっちの世界がどれだけ広いか分からないけど、そうそう出来るものじゃないはず。

「でも、再生させるって言ったって具体的にどうするつもりなの？」

まさか苗木を等間隔に植えて歩くわけじゃあ・・・

「僕はね」

彼がゆっくりと手のひらを開くと、そこから草花がむあっと生まれてきた。

「草木を生むことができるんだ。」

地面に落ちた種からはもう花がついている。

「すごいっ・・・！」

「後は精霊の力を借りるともっと広く生命（いのち）を撒くことが出来ると思うんだ。」

「精霊！？」

「そう、この辺りに住んでいるはずなんだけどね。そこを探す途中でリサにあったってわけさ。」

神様に精霊に・・・完璧ファンタジーの世界だけど、アドニスの目はウソをついてるようには見えない。

「リサも付いておいでよ！」

「！？」

「きっと行く宛だってないんだろう？僕と一緒に行こう！」

こうもストレートに誘われたことのない私は思わず顔を赤らめた。

もしこれが、もといた世界であるならナニこいつ？と引いてたかもしれない。

でも今は頼れる相手は彼以外にいない。

それに何より・・・

嬉しかった。

「うん！ヨロシ・・・」

ざぱんッ

「ク」という言葉だけを残して私はまたまた川へと逆戻りした。

「リサ！！」

私は川の流れも手伝って、凄い勢いでアドニスから遠ざかっていく。

いいかげん嬉しくもないサプライズにも慣れてきていたので、自分が今、魚みたいなヤツにエサと間違われて捕まったのだと冷静に判断出来た。

あぁ、小さいってこんなにキケンなのね。

虫の気持ち、今なら分かる気がする・・・

捕まえてきたコイツはイルカやサメの様に背ビレを覗かせて泳いでいるので、とりあえず溺れる心配はなかった。

くわえられているのは布切れなので、手を離せば解放されるのだけれど、違う意味でも解放されてしまうのでここは死んでも離す訳にはいかない。

大自然の真っ只中でフルモンティ、もといフルヌードなんてイヤ！

「ぉおーっ！釣れた釣れた！」

暫く呆然と流れに身を任せていると、歓声と共に宙へと飛ばされた。

どうやら私をくわえた魚は釣られたらしい。

鳥の羽根飾りが目立つその人が、ブラリと魚を顔の前に寄せた時にお互い目が合った。

「ん、この魚、奇抜なアクセサリをつけてるな～。」

「アクセじゃない！！」

「うお、しゃべった！」

次から次へとナンなのよもう・・・

一方、アドニスは几帳面にも僅かな荷物を懐に丁寧にしまい込んでから、いざ鎌倉とばかりに私の救出に向かった。

彼が川沿いをひた走りに進んでいくと、周りの景色は装いが変わってきた。

川筋は両脇とも急峻な崖に挟まれ、赤茶けたそこかしこからは逞しくも木々が根付いている。グランド・キャニオンにアマゾンのジャングルを乗せた、と言うと一番しっくりくる。

その崖を伝い飛びながら、彼は私の名前を呼び続けた。

「それにしても・・・暑いなぁ。」

うだるような熱気が呼吸をしているかのように流れてくる。木々も心なしか元気がないようだ。

「あ、神様だ！」

「ホントだ！助かったぞ！」

私、とまではいかないが、アドニスの体の3分の1程のサイズのチビ達が急ぐ彼の行く手を阻んだ。

「神様、お願いがあります。どうか我々の村まで来てください！」

「あ、えと・・・」

お人好しなアドニスは、こちらの事情も切り出せないまま村まで手を引かれていった。

着いたところで、丁度魚と一緒にカゴに積み込まれた私と出くわした。

「アドニス！」

「リサ！」

「ん、もしかしてこのアクセサリ知ってるのか？」

「だからアクセじゃないって言ってんでしょーがっ！」

私よりちょっと大きいからって偉そうに！

とにかくも無事に再会を果たした私たちは、とりあえず村人達の話を聞くことにした。

「私たちはこの近辺に住んでいるシルフです。」

話し始めたのはいかにも長老です、といったヨレヨレなおじいちゃんだ。

「やっぱり精霊なんだね？よかった、ちょうど君達を探してたところなんだよ。」

「そうでしたか。ならばどうでしょう、ここはひとつ交換条件ということにしませんか？」

これを快諾したアドニスは、まず彼らの依頼に耳を傾けた。

「我々の頼みというのは、この先にある風の谷に居座った神様を追い払って欲しいのです。」

「なんで追い払わないといけないわけ？」

「風の谷は我々の力の源である風が生まれる場所なんですよ、小さい神様。」

小さい神様って・・・。

「そしてそこに居座った神様は火の精霊を使役するらしく、風の谷からの風がみな熱風となって流れてくるのです。おかげで我々の主食である木の実が採れなくなりまして・・・今は、仕方なく魚を食べてしのいでいるのです。」

涙ながらに語る背後では、村人達が旨そうに魚にかぶり付いている。そんな村人達が見えてか見えてないのか、アドニスは構わず話を続ける。

「わかった。その火の神様と話をつけてこればいいわけだね！」

「話をつけるだなんてとんでもない！あの神様はケンカッ早くて手におえないんですよ。」

そういうと何人かのシルフは焼け焦げた服をヒラヒラして見せてくれた。確かに大人しい神様じゃないみたいだ。

「うーん、手荒いのは得意じゃないんだけどな・・・仕方ないか。」

私たちは案内役のシルフを1人連れて、早速その風の谷へ向かうことになった。

「ところでアナタの名前はなんて言うの？」

川沿いの突き出た岩を、ヒラリヒラリと伝って飛ぶアドニスの懐から私は案内役のシルフに聞いた。

「名前なんてないよ小さい神様。」

「無いの？！じゃあ村でどうやってきたのよ？」

「どうって、普通にやってきたさ。」

「変なの。じゃ私がつけたげる！」

改めてこのシルフを眺めてみた。

目はクリッとして可愛らしい顔だけど、口調からすると男っぽい。

服装は羽飾りが立派なストールが目を引く。

腰にも刀のように、大きな羽根をさげている。

「ん～・・・風の精霊だから、ふうちゃんねっ！」

「ふうちゃん・・・？変な名前だな～、けどいいや。今日から僕はふうちゃんだ！」

ふうちゃんは嬉しそうにニッコリ笑った。

「2人ともすっかり仲良しだね。ところでふうちゃん、風の谷はまだ遠いの？」

「もう少しさ。次の別れ道を右に遡れば着くよ。」

言われた通りに進んでいくと、やがてひときわ熱い熱気と共に視界が大きくひらけてきた。

そこはまるで機械で大地を抉ったかのような大空洞が出来ていた。縁からは幾筋もの川が流れ込み、遥か下にある湖に潤いを与えている。

底の深そうな蒼い色の湖には中心に小さな小島が浮いていた。

その島にぐうたらとしている輩が件の神様だろう。遠くから見てもふてぶてしさと熱気はしっかり伝わってくる。

私たちが来るのを察したのか、ソイツは寝そべったままグリと視線をこちらへ向けてきた。

長老の言う通り話が通じる相手じゃ・・・なさそうね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5414f/

イノセント・ワールド

2010年11月24日05時25分発行